
救済の進軍

小田多井夕画

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

救済の進軍

【Nコード】

N3554Z

【作者名】

小田多井夕画

【あらすじ】

召喚術で異世界の生物や物質を召喚して発展した世界。その世界で起こった大戦の最中、大国が発動した極大召喚術が、敵国の介入により暴走、無限に湧き出す魔物により、世界に未曾有の召喚災害が訪れた。人々は都市の城壁の内側にひきこもるような生活を余儀無くされることとなる。そんな中、インテシアという都市の領主の娘として生まれた、エリア・メインティアルは前世である地球での記憶と、その更に前の前世である別の異世界の魔王であった頃の一部の力、更には父親から受け継いだ大召喚術をもって、部下たち

とともに世界を救うための進軍を始めるのだった。

序章 始まりの日（前書き）

中二病とノリとテンションに任せて書いて、推敲もしていないため、非常に読みづらいたと思います。ご容赦ください。

序章 始まりの日

エリア・メインティアルは振り向いた。自分がここまでに集めた直属の部下たちへ振り向いた。

彼らの存在が、彼女の仮説を肯定し、そして、彼らの働きがエリアを望む位置まで推し進めてくれた。

エリアは彼らに向かってうなずき、壇上へ向かって足を踏み出す。その長くまつすぐな白髪をゆらしながら、一段一段踏みしめてあがつていく。

そして、壇上に立ったエリアの目に、広場を埋め尽くす人々が飛び込んできた。その中の多くの人々が笑っている。表情に希望の光がともっている。人々の表情の中にエリアへの信頼と信用と支持する意思が見て取れる。

エリアはもしかしたらこの後、自分がそれを壊してしまうかも知れないということを考え、しかし、その考えを押さえ込む。そして、自分の目的のため、自己の感情を希望へ向ける。多くの人がついてくるのはより輝かしい希望にだと、エリアは知っていたから、無理やり感情を希望へ向け、演説を始めた。

「領民たちよ！今日は良くぞあつまってくれた！これだけの人々が私が話すこの都市の未来に興味を持っていてくれることを嬉しくおもう！だがすまない、今回の演説はこの街の未来を話すものではない。今回の演説で、私が諸君らに伝えたいのはこの世界の未来だ！

諸君も知つての通り、大戦中であつた68年前、カーデイス国の無限召喚式がレイロカ帝国の術式介入の結果暴走し、未曾有の召喚災害となつた！それにより人間は城壁の内の閉じた都市でしか生活できず、じりじりと滅びへ向かつて進んでいつている。都市内で確保できる資源はいずれ枯渇するし、人口も減り続けている。私の父であるクロード・メインティアルが領主を務めていたときより、皆にも協力してもらい、都市全体で節制と新資源の発掘に力を注い

できた。だからこそ、このインティアは68年間も耐え続けることができた。資源を備蓄してきたからこそ、魔物たちの不意の襲撃によって砕かれた城壁を再建することもできた。だが！このまま同じことを続けていても問題は解決しない！城壁の外では無限召喚により魔物が増え続け、城壁の内では人も資源も減り続ける。仮に召喚がとまったところで外の魔物たちが消えることもない。このままではいずれこの街は滅びてしまう！そして、それは当然この街だけではないだろう！世界全体で生き残っているすべての都市が、同じような現状におかれているはずだ！この世界危機である召喚災害に対処するには、この世界の全人類で挑むしかない！そのために私は他都市へ向けた進軍を開始する！」

響き渡るエリアの声に、彼女の領民たる人々は様々な反応を示した。神妙な顔でうなずくもの、驚きのあまり啞然として立ち尽くすもの、顔を恐怖にゆがめるもの、大きな感情の渦がその広場に渦巻き始めようとす。だが、エリアはその前に、感情が爆発する前に、更なる言葉をつむいだ。

「私が領主の座についてから17年！この進軍のために多くのことを準備してきた！軍備の強化はもちろん、農業改革や魔物の肉の食用化加工の効率化といった食料問題の改善、火薬の研究と銃の発明による、非召喚術者への対魔物戦闘能力の付与、召喚術式研究による召喚術の効率上昇。それらはすべて、私がこれからの進軍のためにすすめてきたものであり、諸君らもよく知る、私の出してきた成果だ！これだけの成果をだし、この街は今ままで、かなり長く耐えることができるはずなのだから、わざわざリスクを侵して遠征する必要はないのではないか、というものがいるかもしれない。だが、この進軍は今しかできない！これまでの状況では、進軍を始めるには力が足りなさ過ぎだし、これ以降ではこの街の力はじりじりと衰えていくだろう！進軍するにはいましかないのだ！」

諸君は認めていてくれるはずだ！たった5歳で領主を継いだ私が、多くの悪意に屈さず、常に成果を挙げ続けてきたと！その信頼をも

う少しの間でいい、私に向けていてくれ！私はこの世界を必ず救い出す！未来を生きるものたちへ希望の芽を残すために！未来を生きるものたちへ絶望の種を残さないために！私は兵たちとともに命を賭して世界を救い出すと誓う！だから頼む！諸君の希望を、諸君の未来を、諸君の命を……私に託してくれ！」

強く語ったエリアは、額に汗を浮かべていた。細く、ラインの美しい肩が、軽く上下している。

紡ぎだされたエリアの言葉、その言葉を領民はすぐには受け入れられないだろう。それでもエリアの言ったように、このままでは世界は滅びる。進軍のタイミングは今しかない。

だからこそ、民に受け入れさせなければならぬ。ゆっくりと死に行くのではなく、成功率の低い手術を受けるような選択を。

だからこそエリアの演説だった。演説によって領民の心は揺れている。その状況であるからこそ使える強硬手段が、エリアにはあった。

『魔眼』

遙か昔、エリアの魂の器が持っていた「他者を支配する魔眼」その名残。いまやかつてのような力を持たぬエリアの体では、この広場の者達のうちの一部を催眠術にかけるのがやっとだ。しかし、直接一対一で見たものならば、ある程度なら操ることが可能だった。

「……そうだ、このままじゃこの世界はジリ貧だ！領主様の言うとおりだぜ！みんな、ここで死ぬのを待つよりは、希望に向かって進軍しようじゃないか！」

「おお！そうだ、俺たちは魔物にやられるだけじゃねえ！今なら俺だって銃を持ってたたかえる！進軍だ！他の都市のやつらも助けて世界も救ってやろうじゃねえか！」

広場の中心あたりで上がった言葉に呼応するかのように、広場のあちこちで声上がる。その声は心の揺れた領民たちにすぐに伝染し、数十人、数百人、数千人と広がっていく。

ごめんなさい。

エリアは心の中で謝る。

最初に声をあげたものたちは、演説より以前にエリアが魔眼で支配下に置き、この広い広場の要所に配置したものだだった。エリアは彼らが思っていないようなことを強制的に言わせたことに、罪悪感を感じる。

私に罪悪感を感じる権利なんてないのにね……

広場に集まったものたちの大勢は決した。彼らの意思は、この街の12万人の人々の多くに伝播するだろう。これで、ようやくエリアは一步を踏み出す準備が整った。

「おつかれさまです、エリア。魔眼の効力維持と演説でお疲れでしょう。あとは私が……」

後ろを振り向くと、自分の最古参の直属部下であるリグリア・エーデイスが壇上へ上がってきていた。彼が、進軍に向けた詳細日程や細部の情報を、領民へ伝える役割となっている。

「ごめんなさいね、あなたに大変なお仕事を押し付けて」

「元魔王ともあろうお方に心配していただき光栄です。大丈夫ですよ、ここはまだスタート地点ですからね」

「元魔王といっても、魔王の後に一度ただの人間はさんでるんだけどなあ……」

その日が始まりだった。

エリア・メインティアルと八人の直属部下を中心とした、世界救済のための進軍、その始まりの日だった。

一章 序 エリア・メインティアル（前書き）

設定説明です。面倒だと思う人は次の話から読み始めてもいいと思います。中二病とノリとテンションに任せて書いて、推敲もしていないため、非常に読みづらと思います。ご容赦ください。

一章 序 エリア・メインテイル

エリア・メインテイルが、正確に言えばその魂が生まれて最初に思ったことは、

今回の転生はおかしい。

だった。

何せ、エリア・メインテイルの体に宿る前、地球の日本人として一生を終えるとき、彼女の魂はもう転生しなくてもよいと思っていたのだ。

日本人女性であった彼女の人生は、生まれつきの病気のせいで短いものだった。しかし、学びたいことを学ぶことができ、親しいものたちと笑いあつてすごすことができた。そんな充実した人生だったから、彼女はもう転生を望んではいなかった。

しかし、彼女は転生した。正確に言えば転生させられた。それは何らかの強制的な力によって魂が呼び出され、それがこの世界の体に定着したというような感覚。

彼女はこの世界に転生するまでに、すでに二回の転生を経験している。一度は魔法を使える猫から、人間への恨みによって魔王の娘の器に転生したとき。二度目は、相思相愛であった勇者の剣に貫かれて死んだ後、生まれつき不治の病を患った人間に転生したときだ。どちらの場合も、魂のもつ強い意志と、神との契約によって転生していた。一度目のときは、人間に復讐するため、異世界の魔王となり、二度目のときは、人間のことを理解するために、人間に転生した。どちらのときも、人間への復讐心や、勇者とともに生きることのできなかつた無念感、そういった強すぎる感情が神まで届き、そうして現れた神との対話と契約で転生させてもらったのだ。

それが今回はまっただくなかった。神が言うには転生しない魂は、記録を浄化されて、ほぼ白紙の状態で別の何かに宿るらしい。だが、今回彼女が転生したのは魂の浄化の前だ。死して唐突に働いた強制

力が、彼女をこの世界へと飛ばしたのだった。

彼女は生まれてすぐの頃は疑問に思っていたが、エリア・メインティアルとしてこの世界の常識を知ってから、とある仮説にいたるそれは

『この世界で今暴走している無限召喚式が、異世界の死者の魂もごくまれに召喚してしまっているのではないか？』

というものだった。

そして、エリアが6歳のとき、その仮説を証明するものと出会うことになる。

エリアの父であるクロードは、エリアが四歳の頃に、大規模召喚の反動によって死亡した。この大規模召喚はメインティアルの家系に古くから継承されるもので、大量の呪力を使って龍を召喚する術式だ。この術式は元来、長い時間をかけて準備し、発動するものであるが、クロードは魔物たちの不意の大規模襲来を迎撃するために発動したため、その生命力の大部分を失うこととなったのだ。そして、その一カ月後、エリアへの術式継承を済ませた直後にクロードは死去し、更に半年後には、まだ5歳であったエリアが領主につくことになった。

しかし、5歳の子供が領主である以上、多くのものたちがエリアを侮り、自分の思うまま利用しようと画策することは、もはや自明の理であった。そのため、エリアが領主になって最初の1年は、部下たちの人柄を見極めたり、信用を置ける部下を探すことに当てることだけに費やすことになった。力の弱い器ではあるが、エリアは元魔王である。当然、統治するということがどういふことが熟知している。それでも、たった一年で部下の構成や人柄を把握し、信用を置ける部下を最低限確保したのは、すさまじい早さだといえるだろう。だが、エリアにとってスムーズな人員掌握よりずっと大きか

ったのは、リグリア・エーデイスとの出会いだった。

彼こそが、エリアの仮説の証明である。

つまり、リグリアも転生者だったのだ。

リグリアはエリアが領主となつてから最初の新職員だった。リグリアの高い能力に目をつけたエリアが面接をしたとき、なんと彼はこの世界では発展していない『魔法』を使つて見せたのだ。エリアは自分の魔法や魔眼をリグリアに見せ、自分の前世と彼の前世の話をし、その後即座に彼を直属の部下に添えた。

それが、エリアの計画の始まり。

エリアは前世である地球の知識の中で、現状のこの都市でいかにそんなものを、作り出していった。

それと同時に他の転生者を探し、直属の部下を増やした。

直属の部下となったものの中には、地球にも、エリアが魔王だった頃の世界にも、猫だった頃の世界にもない力を扱うものもあり、エリアの計画の進行を更に推し進めることとなった。

そうして、たった17年で、エリアは自分の計画をスタートラインまで推し進めたのだった。

一章 一 領主の力（前書き）

本編開始です。中二病とノリとテンションに任せて書いて、推敲もしていないため、非常に読みづらいと思います。が、ご容赦ください。

一章 一 領主の力

「諸君、ようやくこの日が……進軍の日が来た！」
始まりの日より三ヶ月たった今日、エリアは再び壇上に立っていた。

あの演説の直後より集まった、すさまじい数の志願兵を、エリアは急ピッチで部隊に組み込んだ。可能な限り直接戦闘を避けられる職種の部隊を中心に、新規兵を組み込み、全部隊を再編成するのに三ヶ月間時間を使い続けた。

さらに、部隊編成や様々な進軍の準備と並行して、大規模召喚術の準備が三ヶ月かけて行われた。改良に改良を重ねたこの術式による、エリアの大規模召喚が、今回の進軍の狼煙となる。

「今ここに集まった兵士諸君の中には、三ヶ月前まで召喚術はおるか、銃にも触れたことなかったものが多数いるだろう。それでも、私の意思に賛同して、志願してくれて……ありがとう。諸君はようやく、部隊の規律や銃の使い方の方の初歩を、学んだところかもしれないし、最終募集で入隊した者たちはいまだにそれもままならない状態かもしれない。しかし、君たちが志願してくれたことこそが、何よりの力となる。」

この前まで守るべき市民でしかなかったものが、自分たちと同じ位置に立って、世界のために戦おうとしてくれている。大きなリスクを背負うものだとして理解して、それでも私の考えに賛同してくれている。前者は多くの兵たちの、後者は私や、私と意見を同じくする私の部下たちの、大きな心の支えだ！それは、これから訪れる多くの苦難において、多くの者たちを救うだろう！」

現在のインテリア軍の総勢は3万4千。三ヶ月前までは2万だった軍が、1.5倍近い数となっている。

このうち、新規兵7千と熟練兵3千の計1万人の部隊で、主力部隊進軍中のインテリアの警護を行い、残りの主力部隊で、進軍を行

う。

進軍先は、サグリスと呼ばれる都市だ。サグリスは無限召喚暴走時の記録にある、避難民を受け入れた大都市の中で、インテアから最も近い場所に位置していた。

今回の進軍の状況を考えると、順調に進めば、5日で着く位置である。

「これより私たちは、城壁の庇護より離れる。常に命の危険を身近に感じる進軍だ。だが、諸君の意思はその程度のことです。屈するものではないと信じている。諸君の意思と力を、城壁の外を我が物顔で闊歩する魔物どもに、知らしめて欲しい。」

だがまず最初に、私が諸君に示そう！私たちがこれより進む道で！私の意思と力が、諸君の信頼に足るものであることを！

今から示すものが、私が世界を覆う災厄に反抗する力だ！」

そういつて、エリアは手を天に向かって掲げ、叫んだ。

「メインティアル家17代目当主、エリア・メインティアルが乞う！我はここに血の契約に基づき、力の顕現を欲す！軍神龍・エグラディアよ、今こそその力をここに示したまえ！」

エリアの長い白髪が、ゆらゆらと彼女の背後でゆれ始める。この三ヶ月間を使つて都市に大きく描かれた凶形が、青白い光を帯びる。この都市にいるすべての召喚術者と、呪力への感受性が鋭敏なものは、その圧倒的な呪力と、緻密にあまれた召喚術式に目を奪われる。青白い光が更に強さを増し、それとともに空が暗転し始めた。強大な術式が今にも発動しようとしている前兆だ。

エリアの瞳の色が、黒から紫に変化した。そして、掲げていた手を一気に振り下ろす。

瞬間、召喚術者の目には、力が爆発したかのように映った。

普通のものの中には、天に魔方陣が転写され、その中間に穴が開いたかのように移った。

そして、その中空に開かれた穴から、巨大な赤紫色の龍が姿を現す。

空気がたわむ気配と、空間が破碎するすさまじい音。それが領主の召喚術だとわかっていながらも、領民たちは恐怖した。圧倒的な力の前に、理屈も理性も一瞬にして屈してしまったのだ。

「なるほど、これだけの召喚術の力をただ一撃に注ぎ込んだか。確かに、それでもしなければ不可能な注文よ……よかるう、力を貸してやる」

領民すべての頭に声が響く。その声から感じる力から、誰もが一瞬で、龍の発した言葉だと理解した。

「さすがは我が守護神、我が意図を理解していただき、幸いです」
エリアは龍に敬意を払ってはいるが、術式そのものは龍の行動をすべて確定させていた。今回の召喚において、この龍が自由にできるのは言葉を発することのみだ。だが、それでも龍が式に抵抗すること、協力的なのでは、消費する呪力も、これから行う攻撃の成功率も、格段に違う。

全長100メートルを超える龍が、空中で身を翻す。それだけで、すさまじい呪力が空間を奔った。

龍の向いた方角は、ちょうどサグリスのある方向だ。そちらに向かって開いた龍の口に、膨大な呪力が集まり、そこで何度も力の質が変革する。

そして、その力は轟音とともに解放された。龍の放った力は、凹レンズのような術式いくつかをくぐって、巨大な光の柱となり、龍の口の動きに合わせて、インテリアの城門前から、サグリスまでを一閃する。最大まで拡大された、その力の円柱の直径、実に200メートル。その分、力の密度は落ちてはいるが、術式にこめられた効力は正確に働いたことが、エリアの第二の魔眼には見て取れた。

エリアがこの三ヶ月かけて作り出した、今回の召喚術式にこめられた、龍への行動指定は、『進軍の障害となるものだけを対象指定した広範囲攻撃』だ。これをもって、長い間人の手から離れていた、城壁の外の世界に、進軍の経路を作ることが目的だった。かなりシビアな対象指定攻撃で、なおかつ広範囲攻撃である。当然、すさま

じい量の呪力が必要となるため、龍の召喚可能時間は攻撃一回に絞らないといけない。失敗すれば、進軍はかなり困難なものになるところであったが、幸いにもこの攻撃は成功に終わった。

「貴様の注文は果たした。貴様の望むとおりの道をつけることができたはずだ。」

では、代償として、貴様がこの先二ヶ月で蓄えるはずの呪力をもらっていく」

龍がそういうと、エリアの全身から呪力が抜け落ちるとともに、龍が現れたときの穴へと帰っていった。彼の龍とメインティアル家の契約は、ギブ&テイクである。メインティアル家は力を借りた後、その後自分が蓄えるであろう呪力を渡すのが契約内容だ。

これによって、エリアはこの先二ヶ月間、召喚術と、直属部下から学んだ呪力を使う力、『天呪』を使うことができなくなった。召喚が使えないということは、エリアにとって今の器での最大の切り札が使えないということになる。

「私は今、諸君に力と道を示した。次は諸君が示す番だ。諸君の力を私に見せてくれ」

だが、エリアはまったくそれを気にした風もなく、自身の領民へ向けて言葉を発した。

いまだに、先ほどの召喚の衝撃から抜けられない領民は、一瞬反応が遅れた。しかし、すぐにあちこちで雄たけびが上がる。すぐに広がったそれは、怒号となって広場を振るわせた。

それを満足げに見下ろしたエリアが、腕を横薙ぎに払い、告げる。「これより、進軍を開始する」

一章 二 進軍開始（前書き）

設定の話が結構多いかもしれませんが。

闘気の効果を身体強化だけでなく武器強化もできることに設定変更。
というかもとよりそのつもりだったけど書き忘れてた。

一章 二 進軍開始

インティア軍の移動間の配置は、物資の運搬部隊や、伝達要員などの、新規兵を中心に構成された補助部隊と、エリアや直属部下、直属部隊のいる司令部をあわせた5千人が中央。その両側を戦闘員や召喚術者を中心に編成された7千5百ずつ、合計1万5千の部隊が挟み込むように配置されている。

前と後ろは両脇の戦闘部隊が突出しており、正面や後方からの魔物の襲撃などに対しては、その両脇の部隊が内側へ折り込まれるようにして、非戦闘部隊と魔物の接触を避けることができるようになっている。

合計二万の部隊の中に、召喚術者は約4000人。両側の戦闘部隊にそれぞれ約2000人ずつと、ごく少数の精鋭が、直属部隊に配置されていた。

インティア軍の主力武装である銃は、エリアの作った設計図に基づいて作られている。この銃は技術的な段階を数段飛ばして、地球の一世代前の小銃程度の性能をすでに持っており、正面からの戦闘ならば、一般兵が召喚術者を上回ることができるほどの状態だ。

しかし、魔物の持つ耐久性は、一般生物のそれを数段上回るため、この銃の圧倒的な威力をもってしても、一撃でしとめることは、よほど上手く急所に当てることのできない限りは不可能である。そのため、対魔物戦闘が中心となる今回は、召喚までの時間稼ぎと、召喚後の援護射撃が射手の役割となる。

「それにしても、弾薬の大量生産が可能になるのはいつになることやら……」

そういったのは、エグスト・クリエスタだ。エグストはエリアが四番目に見つけた転生者で、前世の世界は、1970年代程度の科学技術と、それなりに高度な魔法技術を持つ世界だったらしい。金髪碧眼の美青年だが、お調子者で、いつもへらへらしている。しか

し、戦闘能力が高く、戦闘中は非常に頼りになる男だった。

「まずは資源の確保と工場の設置が必要だから、なかなか難しいわ。もうしばらくごまかすしかないわね」

エグストの言葉に答えたのはエリアだ。

インテイアは幸運なことに、地下に鉄の鉱脈があり、鉄の資源は豊富だった。そのため、銃そのものの生産工場は十年程度で形にできたが、弾薬はそうはいかなかった。

火薬の原料が確保できなかったのだ。

そのため、現在弾薬に使用している火薬は、エリアと直屬部下たちで作った魔法術式によって生成されている。

現在使われている火薬は、ニトログリセリンとニトロセルロース。セルロースとグリセリンは通常手段で確保し、ニトロ化を魔法によって行っている。空気中の窒素と酸素を、魔法の力で無理やりニトロ基の形で化合させて、安定させるのだ。

当然、軍全体の弾薬に必要な量を生成するために必要な魔力は、今のエリアたちの保有魔力量ではまったく足りない。

しかし、この世界では魔法が発達していないというだけで、この世界の住人も潜在的に魔力を保有している。そのため、エリアと部下たちは、都市全体の人間からほんの少しずつ魔力を吸収する術式を張り巡らし、それによって足りない分の魔力を補っていた。

だが、いくら少量ずつといえど、魔力は生命力とかなり深い関係にある。そのため、連日発動させることは当然不可能だし、頻度が少なくとも、市民の生活に影響を与える可能性がある。

そのため、以前から弾薬の生産を、魔法に頼らない方法で実現することが、エリアたちの目標の一つとなっていた。

「天呪でも似たようなことができればいいのだけどね」

エリアが今言った天呪というのは、エリアの直屬部下の一人、ミア・レスティンの出身世界の技術だ。この技術は、呪力を使って、割と大雑把な事象を起こすことができるというものだ。大雑把である代わりに、戦闘時の攻撃力変換効率がよく、なおかつこの世界の

召喚術の消費エネルギーと同種の呪力を使うため、エネルギー保有量が多い者が、この世界にも多くいた。しかし、大雑把であるため、魔法より応用の幅は狭く、物質の二ト口化など、夢のまた夢といったところだ。

ちなみに、呪力と魔力はまったく別のエネルギーである。更に言えば、エリアの直屬部下の使う能力には、更に別種の力を使うものもある。最初はエリアも驚いたが、それ以降は自分の知らないエネルギーも存在することを前提に動くことにしていた。

「日中は順調に行けそうですね、エリア」

後ろから歩いてきた、黒髪長髪の三十代ほどの男が、エリアに声をかけた。リグリアだ。

直屬部下であるリグリアが歩いているのは、インティアには騎乗用の動物が存在しないからだ。47年前の大規模襲撃の際に、多くの人間と家畜や騎馬などの動物が犠牲になった。そのとき、家畜は一部が生き残り、それより再度繁殖で増やすことができたらしいが、騎乗用の動物はほぼすべて全滅してしまったらしい。そのため、エリアだけは直屬部隊の召喚術者が召喚した魔物に乗っているが、他は全員が徒歩での移動となっている。

「そうねリグリア、アステイたちから何か連絡は？」

アステイというのは、直屬部下のアステイ・リストのことだ。アステイともう一人、直屬部下であるエンディ・モリンドの二人は、インティアに残って、普段エリアが行っていた公務の代理と、都市防衛軍の最高指令をしている。インティアのほうで何かが起こった場合は、エリアの作った魔法具で連絡することになっていた。

「特に何もありません。二人ともあまり魔法が得意じゃありませんからね、よほどじゃないと魔法具を使用することはないでしょう」

アステイの前世の世界の特徴は、全体での特筆すべき技術などはなかったが、悪魔契約者が100人に1人ぐらいの割合でいたらしい。アステイは悪魔との契約で、片足と片目を供物に、千里眼を手に入れたそうだ。その契約は魂に刻まれたものであるため、今でも

アステイは左足と右目がない代わりに、千里眼を持っている。

エンディのほうは、前世で武術と剣技を極めていたそう。特殊な力としては、身体・武器強化のみだが、変換効率のすさまじく高い、闘気という力を使う。前世の世界にも魔法はあったらしいが、武術と剣技、闘気のコントロールを磨くため、魔法に手を出す余裕などなかったらしい。

そのように、二人とも前世で魔法を使った経験がないため、魔法の使用は苦手としていた。

エリアとしては、完全に主観的な意見でしかないが、二人とも前世ではまったく女らしくない生き方をしていたんだなと思う。

「そうね……それはそうと、全部隊、三十分後に停止、すぐに野営の準備をするという伝達をお願いします」

「了解しました」

伝達はいくつかの方法で行われるが、今回使われるのは信号弾の発射だ。新規兵を中心に構成される伝達部隊が、全部隊を示す黄色、十分後を示す青を三発同時、停止を示す紫、野営準備を表す白の信号弾を順番に空へ向けて放った。一度に全軍に指示を出すことができるのが、この伝達方法の強みだ。

日はもう傾きかけている。新規兵が多いことも考えると、この日の進軍は後三十分がぎりぎりだろう。そうでなければ、野営の準備完了が日が落ちた後になってしまう。そうなることは絶対に避けなければならなかった。

「これからが、最初の難関ですね」

エグストの言うとおりだった。

現在の軍の布陣は縦長で、両側の部隊の端の列から、龍の一撃で作られた街道の端まで、それぞれ50mずつある。50m障害物のない地帯が続くため、とても襲撃を察知しやすいといえるが、それでも夜には見通しは悪くなるし、活動する魔物も増える。

昼間は龍の一撃の直後ということもあり、警戒して襲撃してこなかった魔物たちが、この夜に一気に襲撃をかけてくる可能性があっ

た。

「ええ、今日の程度上手くしのげるかで、今回の進軍の状況が変わってくるわね」

エリアは、鋭いまなざしで、街道の先を見つめていた。

一章 三 最初の夜 インテリア側（前書き）

設定の話がまだあります。中二病とノリとテンションに任せて書いて、推敲もしていないため、非常に読みづらいと思いますが、ご容赦ください。

一章 三 最初の夜 インティア側

インティア外周城壁上。

そこで、二人一組で見張りをしていた、ウエイズとゲエイリヤは、300メートルほど先から聞こえた轟音に、体をこわばらせた。

インティアを囲む城壁はさまざま高い高さを持っている。それでも上ってくるものは毎日いるが、今回見張りをしている二人組みは、新規兵であるため、いまだに戦闘の経験がなかった。その上に先ほどの轟音である。二人が身をすくめるのも仕方なかった。

さらに一つ補足すると、二人はまだ知らなかったが、先ほどの轟音を起こすほどの魔物は、普段あがってくるような雑魚ではなく、中級以上の魔物であることがほとんどだった。

しかし、二人も自分の務めはわかっている。恐怖は消えはしなかったが、すぐに轟音のしたほうへ走り出した。

銃が使われ始める前、剣や槍が主武装だったころは、よほどの実力がなければ、魔物の皮を突き破ってダメージを与えることは不可能だった。そのため、一般兵の基本的な役割は、召喚術者が到着するまでの時間稼ぎであった。

しかし、今の彼らの銃ならば、最低レベルの魔物ならば、上手く急所に当てれば一発でしとめることができる。その上、装備によっては、20発の弾をフルオート射撃することも、遠距離からの狙撃も可能だ。そのため、現在では魔物の撃退も一般兵の仕事となっていた。

二人は強い緊張と恐怖を持って、轟音の下方へ向かっていたが、その緊張と恐怖は、よい方向に裏切られることになる。

すでに魔物は動かなくなっていたからだ。

少しばかり抉られた城壁の上には、血を流して倒れている巨大な魔物と、それを見下ろすようにたっている短い黒髪の少女がいた。

その明らかに中級レベルの魔物を、誰が倒したのか疑問に思いながら、二人は少女に近づいて声をかける。

「お嬢ちゃん、どうやってここに来たんだい？ここは危険だ、早くはなれなさ」

そのとき、声をかけていたゲイリヤは、ウエイズに肩をつかまれて、言葉をとめた。振り向いたゲイリヤに、ウエイズが指で少女の右手を示す。

そこには、真つ赤な短剣が握られていた。

さらによく見ると、何も握られていない左手と右足も血にぬれている。

「ひっ」

ウエイズが驚いてあげた声に、反応するかのように少女が振り向いた。

「ん？どうした？……まあいいや、見張りご苦労様」

「モ、モリンド司令！お疲れ様です！」

振り向いた少女を見た二人は、さつきとは別の驚きで、一瞬悲鳴を上げそうになった。

なにせ、そこにいた少女が、自分たちの軍の司令官である、エンディ・モリンドだったからである。

すぐさま最敬礼の姿勢をとった二人に対し、エンディは微笑みながら告げる。

「うん、お疲れ……敬礼解いていいよ」

そういわれても、新規兵二人は戸惑って、敬礼を解くことができなかった。

「いや、だから敬礼やめていいってば……」

そこまで言われて、ようやく二人は、ぎこちない動作で敬礼を解いた。

「ねえ、今の動作を君たちの部隊の先輩たちが見てたら、すっごく怒鳴られんじゃない？」

「はい！失礼いたしました！」

二人は、エンディに言われたことに、入隊から二ヶ月でしみこまれた条件反射の反応を行ってしまふ。

それをみて、エンディは、

「あー……やっぱ今もそんな感じなんだな。いいよ、そんなに緊張しなくても。非常識な、よくわからない教育されてるんでしょ？自分で話振つといてあれだけど、今は公の場じゃないから、規律とか何とか適当でいいから」

「しかしながら、現在我々は勤務中のため」

「いいよ今日はもう襲撃ないから」

ウェイズの言葉をさえぎった言葉に、二人は驚いた。「は？」といった声を上げなかったのは、ここ二ヶ月の部隊での教育のおかげだろう。

「あーあ、もういいや、命令だ。お前たち二人、私に今から上官との話し方じゃなくて自然体で話せ。暇だから話し相手をする。どうせもう襲撃はないし、お前らの上官には私が後で説明しとくから、気楽にしてろ」

二人はエンディの言葉に一瞬戸惑うが、従うことにする。

まず、ゲイリヤが先ほどから疑問に思っていたことを訊いた。

「わかりました。……しかし、なぜ今日はもう襲撃がないとわかるのですか？」

「別に敬語も使わなくっていいんだが……まあいい。で、質問の内容についてだが、アステイが今日はこの襲撃が最後だって言ったからさ。でもって、ここに中級レベルの魔物が来るのがわかったから、私がここにきたんだ」

「リスト領主代理がそうおっしゃったのですか」

「ああ」

ゲイリヤはわざわざ訊き直して、確認したにもかかわらず、にわかには信じることができなかった。領主補佐、つまりはエリアの直属部下たちは、常識はずれに高い能力を持っているといううわさはあった。しかし、このような予知じみたことは、どう考えても不

可能だと思っただからだ。

そして、二人にはわかには信じられないことがもう一つある。そちらの疑問を、今度はウェイズが訊く。

「この魔物はモリンド司令が倒されたのですよね？」

「その通りだが、それがどうかしたか？」

「いえ、その、どのように倒されたのだろうと思ひまして……」

「ん？短剣で右翼を切り裂いて、右足の足払いで両足を吹っ飛ばして、左手でのどをつぶしたただけだが……それがどうかしたか？」

いとも簡単にな事だといわんばかりのエンディの言葉に、二人は絶句した。

二人がエンディの言葉にあった、魔物の部位を見ると、なるほど、確かに言うとおりの部位が破壊されている。だが、両足は文字通り吹き飛んでおり、のどはつぶすどころか引きちぎられている。二人には、このようなことを、武器なしで実現できる人間がいるとは思えなかった。

ましてや、目の前にいるのは、軍の司令官とはいえ、たった16歳の少女である。

完全に現実から乖離したものに思えた。

「なんだその目は……信じていないのか？……そうだ、お前たち、

『魔人の娘』という話を知っているか？」

「『魔人の娘』……ですか、聞いたことはありませんけど……」

『魔人の娘』というのは、都市伝説のようなものだ。

7年前に1人の少女が軍への入隊を希望した。たった10歳前後の少女は、最初入隊は無理だといわれたが、しつこく入隊を希望したらしい。その結果、人手不足だった部隊の下働きに配属されることになった。

少女が入隊して、一年ぐらいたったある日、その少女の所属部隊が見張りを担当する場所で、中級の魔物の襲撃があったらしい。

当時は銃の配備も訓練もまだ不十分だったらしく、見張りは剣や槍が主力だったらしい。

その頃は中級レベルの襲撃があると、近くにいた見張りは全滅、市民にも100人単位の犠牲が出るのが普通だったらしい。

しかし、そのときの死者は0、見張り5人が重傷で、2人が軽傷だったらしい。

なぜそれだけの被害ですんだのか、それは下働きをしていた例の少女が、魔人の娘で、襲撃の知らせが響いた瞬間に、その魔物のところへ向かい、その魔物を素手で意図も簡単に屠ったからだそうだ。「その『魔人の娘』だが、実話でな……私のことなんだよ。いや、私は人間であつて、魔人の娘ではないぞ？だが、私がその頃に下働きをしていて、中級魔を素手で殺したのは事実だ」

二人は再び絶句した。

確かに、『魔人の娘』は事実だという話はよく聞く。更には、少女はその後、領主にその能力を買われ、領主補佐になったという話もある。

だが、新規兵である二人には、完全に与太話のようにしか思えなかったのだ。

「はあ、もうこの話はいいよ。……そうだ、今も『下っ端は自分たちの部屋以外で余計な私語をするな』みたいな指導とかあるの？」

「……はい」

「そっかー……まだあるんだあれ。よくわからないよねえ、ホント……そういうよくわからない指導はなくせて、ちよっと下のやつらにも言ってるんだけど……てか、あんたらその顔だとまだ納得してないの？私がこの魔物倒したつて」

「……はい」

答えにくいが事だったが、二人は正直に答えた。

そして、次の瞬間には二人の視点は空にあつた。

「え？」

「しょうがないから見せてあげるよ」

少し下からエンディの声が聞こえる。

そして、続けて気づいたのは、自分たちが城壁の外側にいるということだ。

三人は城壁の外側を落下していた。

「~~~~~!!!!!!」

二人は突然迫ってきた死の恐怖に、言葉にならない絶叫を上げる。するとその声を聞いたエンディが、

「なんだ、男だろ、情けない声を出すな」

そう言うが、二人はそれどころではなかった。

恐怖を奥底より掻き立てる浮遊感と、城壁の外に飛び出しているという絶望感が、二人の心を支配していた。

迫る地面に、二人は、自分たちよりも低い位置にいるエンディが、墜落死する姿を幻視する。

そして、二人が幻視した瞬間が近づき……

しかし、エンディは当然のごとく着地して見せた。

更には、自分のすぐ後に落ちてきた二人をたやすく受け止め、二人に向けて言った。

「お前たち、私は領主補佐だぞ？ エリア様の直属部下だ。人間なのは間違いないが、普通の人間のはずがないだろ？」

エリアの直属部下は、転生者というだけでなく、みんな特殊な力を持っていた。

エリアの説明によると、この世界の召喚術はかなり大雑把な対象指定で召喚を行うらしい。そして、おそらく、暴走中の無限召喚は、一定以上の強さを条件にしているだろうということだ。

ではなぜ、生前の状態で召喚されず、魂が召喚されるのか。それは、この世界の召喚術が、理性ある命の召喚を苦手とし、それを行うと呪力の消費量が跳ね上がるところにある。そのため、死後の魂が術式に優先的に選択され、召喚されるということだ。あくまで、エリアの推測でしかないが。

ちなみに、エリアが召喚した軍神龍・エグラディアなどは、メイ
ンティアル家の持つ、圧倒的な呪力があるからこそ召喚できるもの
で、並みの術者が100人集まっても不可能らしい。

エリアとして、その呪力と同じ量の魔力を持っていればもっと様
々なことができたと思うわけだが、この世界では魔法が発展してい
ないため、そのことはしょうがないだろう。さらにいうと、天呪を
極めているミリアなどにとっては、エリアの保有する呪力量は、の
どから手が出るほど欲しいものらしい。

「モリンド司令、これからどうするのですか？」

ゲエイリヤがおびえながら問いかける。周囲の森からは、早くも
魔物の息遣いのようなものが聞こえ始めていた。

「ん？魔物どもをぶっ倒しながら、正門まで行って、城壁の内側に
戻るんだよ」

二人は再び絶句する。明らかに常識から乖離していた。

それでも、ウェイズが今浮かんできた常識的な疑問を投げかける。
「正門を開けるのですか？そうすると、中に魔物が侵入する可能性
があるのでは？」

「は？いや、開けないよ？」

「では、どうやって中に？」

「ああ、すでに私が外に出たことはアステイが気づいてるはずだか
ら、正門まで行けば、アステイが領主の館の中まで召喚してくれる
よ。正門周辺には召喚補助の術式が張り巡らされてるから、アステ
イや私ぐらいの実力と呪力量でも、人間五人程度なら召喚できる。
これがエリア様とかミリアさんぐらいになると、何百人とか召喚で
きるらしいけどね……エリア様なら何千人かな？」

二人は再び絶句した。アステイがすでに自分たちの状況に気づい
ているということも、人間のような理性を持った生き物を数人同時
に召喚するというのも、明らかに常識はずれだった。

そして、二人はようやくよく理解する。領主補佐は常識の外の存在な
のだと。

「お、そろそろ来るかな？お前たち、私から離れるなよ」

エンディはそういうと、森の奥を見つめながら、正門の方向へ歩き始めた。

二人も遅れないように続く。

ただただ、森を警戒しながら歩く。

正門まで残り500メートルほどだ。もとより正門に近い位置で彼らは見張りをしていたのだった。エンディもその位置だったからこそ、このような無茶をしたのだろう。

二人は、このまま魔物が出てくることなく正門に着くことを願ったが、当然そう上手くはいかない。

不意に、エンディが戦闘態勢をとった。

それを見た二人が、戦闘態勢をとるよりも先に、巨大な狼のような魔物が飛び出してくる。

それも、標的はウエイズだ。

それを見て、反応する前に死を予感した二人だったが、一瞬で二人の前にでたエンディが、その予感を吹き飛ばした。

エンディの放った回し蹴りが、飛び出してきた魔物の頭部を一撃で吹き飛ばしたのだ。

エンディの軸足は完全に後方をむいており、その上でバランスを崩さず、その軸足のひねりと腰のひねりを生かきった、完璧な回し蹴り。

その動きは二人の知覚を完璧に上回っていた。

「やった！」

「まだだ！」

喜びの声を上げたウエイズを、エンディが叱咤する。

それと同時に、今度は三体ほどの魔物が飛び出してきた。どれも先ほどと同種の魔物だ。おそらくこのあたりを縄張りしているのだろう。

「なんだ、雑魚ばかりか」

エンディは現れた三匹のうち、まずは正面から飛びかかってきたものを見据える。

上半身に飛び掛ろうとするそれに対し、その下に一瞬もぐりこみ、そこから左手で、突き上げるような抜き手を放つ。闘気の強化によって、いともたやすく魔物の皮を突き破った手で、エンディは一匹目の心臓をつぶした。

そうしているうちに、左から出てきていた魔物が、後ろの二人に飛び掛っていた。その魔物に向かって、エンディは無造作に右手の短剣を投げる。

魔物はただの短剣と思い、警戒しなかったのだろう。よけられることなく直撃したそれは、エンディのこめた闘気によって、一撃で魔物の首を切断した。

右から様子を伺っていた魔物は、なかなか動かない。

それを見たエンディは、しばらくにらみ合った後、構えを解いて、後ろの二人に告げた。

「時間の無駄だ、行くぞ。私の剣をそいつから抜いてくれ」

「は、はい」

ウェイズが短剣を抜く間に、エンディは魔物の血がついた左手を、無造作に払った。

「え？」

驚いて声を上げたのは、エンディと魔物を見ていたゲイリヤだ。驚くのもしようがないだろう。

なにせ、エンディの左手から飛び散った血が、魔物の額を貫いたのだ。

「抜きました……そちらの魔物はいつの間にか？」

「今倒した。それより、行くぞ」

ウェイズの持ってきた剣を受け取ったエンディは、すぐに正門へ向かって歩き始めた。

先ほどの襲撃から、200メートルほど歩いたが、その間の襲撃はなかった。エンディを警戒しているのだろう。

そんな中、唐突にエンディが、後ろの二人に声をかけた。

「まずいな、走るぞ」

「え？」

二人が何かを言う前に、エンディが走り出した。二人もあわててそれに続く。

それとともに、かなりの数の足音が森の中から聞こえた。

「急げ、私一人ならどうにでもなるが、お前たちのペースがもう少し上がらないと、まずいことになる」

二人はそういわれて、死に物狂いでスピードを上げた。

エンディは、二人を見て、走ることに邪魔になっていた銃を、二人の腕からとる。

そうしてペースを上げた三人が、170メートルほど走ったところで、前方に開けた場所が見えてきた。

龍の一撃で今日作られた街道だ。

そこまできて、エンディが二人を抱えるようにして、前方へ跳んだ。

三人の後方で、轟音が鳴り響く。

二人を抱えたエンディが、街道に転がり出ると、すぐに二人を解放して、後方を見た。

二人も、少し遅れて後ろを見る。

そこには、50匹近い先ほどと同じ魔物と、群れのリーダー格と思われる、巨大な狼型の魔物が一匹いた。

「私が時間を稼ぐからお前たちは走れ」

「しかし」

「邪魔だからさっさと行け！」

エンディは叫ぶと同時に、抱えていた銃を、飛び掛ってきた二匹に向かって投げた。

その投擲された銃は、それだけで二匹を貫通し、命を奪った。

二人はエンディの言葉に押し出されたようにして、走り出した。後ろから追ってくる魔物はいない。

残り100メートルほどだった距離を駆け抜けて、正門へとつく。唐突に二人の足元が光り、一瞬にして二人の周囲の光景が変わった。

「お二人とも災難でしたね。もう大丈夫です。安心してください」二人の後ろから、落ち着いた声が聞こえてきた。二人はその声につられて振り向く。

すると、そこには一人の少女がいた。

年齢はおそらく10代前半、長い金髪によつて、右目が隠れていることと、左足の義足が気になるが、それ以外は非常に美しい美少女だった。

二人はその風貌に見覚えがある。

「リスト領主代理！」

現在エリアの変わりに領主の公務を行っている、アステイ・リストだ。

二年前に領主補佐になったばかりで、まだたったの14歳だが、非常に優秀な知能を持つ天才少女らしい。

「緊張しないでください……そうですね、とりあえずお茶でも飲みますか？」

二人はまたしてもあっけにとられた。

領主補佐が常識の外にいるというのは、今日いやというほど味わったが、同じ領主補佐が危機にある状況では、もっとあわてるものだろうと思ったからだ。

「モリンド司令を召喚しなくてよいのですか!？」

「ああ、エンディさんなら、まだ正門前に到達していませんよ。それに、たぶんあのぐらゐの敵なら、すべて倒せるので、心配しなくても大丈夫です」

ゲエイリヤの言葉に、アステイはお茶を淹れながら、ゆったりと

した口調で答えた。

まったくあわてていない様子を見て、二人は、アステイが現在のエンディの敵がどんな状態なのか、わかっていないのだろうと思ひ、告げる。

「大丈夫なはずがありません！現在モリンド司令は50を超える魔物と、上級レベルの魔物に囲まれているんですよ！」

淹れたお茶を、ぎこちない歩き方で一步一步運ぶアステイが、今のウエイズの言葉を聞いて、目をしばたかせた。そして、次にはくすくすと笑い出す。

それを見て、今度はゲイリヤが言葉を上げた。

「何がおかしいんですか!？」

「いえ……すみません。思った以上に私とあなた方の認識がずれていたもので……。ええつとですね、50匹とはいっても、あの程度の魔物では、エンディさんにダメージは与えられません。それに、上級と入っても、あれは上級と中級の境目ぐらいの強さの魔物です。その程度ではエンディさんが負けることはないですね」

くすくすと笑い続けながらいうアステイを見て、二人は再び驚いた。そのまるで実際に見てきたかのような様子に、領主補佐の常識外れ具合を、二人は再度実感した。

まさに、無双といえる状況だった。

手刀は文字通り、刀のように魔物を切り裂き、回し蹴りはまるで戦斧のように敵を断つ。

抜き手は槍のように。

踵落しは鉄槌のように。

正拳突きは砲弾のように。

すべてが一撃の下に魔物を屠った。

短剣は使わない。下っ端二人がいたときより、かなり大量の闘気をまとっているエンディにとって、この程度の相手は、武器を使うまでもない。

先ほどやったような、闘気をまとった血の弾丸も使わない。あれは無駄に闘気を消耗する割に、威力が低く、また、それを使わないといけない状況でもないからだ。

最初50匹だった魔物の数は、いまや20まで減っていた。

グオオオオ！

不意に、酷く低音の遠吠えが響いた。

それと同時に、取り囲んでいた残り10匹の魔物たちが後退し、リーダー格の魔物がエンディの前に進み出た。

「ようやく貴様の足りない頭でも、さっきまでの雑魚がどんなにいても無駄だとわかったか……ついでにもう一つ学ぶといい。お前でもまったくの無駄だ」

そのリーダー格の巨狼は、言葉を理解してか、それとも偶然にか、エンディの言葉が終わると同時に、エンディに飛び掛った。

エンディに巨大な顎が迫る。

目の前まで迫った、大きく開かれたあごを、エンディは思いつきり蹴り上げた。

顎が強制的に閉じられる。

しかし、顎を閉じることができたが、顎自体を破壊することはできなかつた。

それを見たエンディは、しかし、にやりと笑う。

「ほう、思ったよりは硬いな。ちょうどいい、ひさしぶりに本気を出そう」

そういったエンディに、再び巨狼が迫り、エンディに喰らいついた。

まわりを囲んでいた魔物たちには、エンディが自分たちのリーダーに食われたように見えた。さらに、それを証明するかのように、巨狼の口の右端から、血があふれ出している。

周りの魔物たちは、自分たちのリーダーが敵を食って、その血が

こぼれたのだろうと思った。

自分たちの勝利を確信した。

だが、それは違うことにすぐに気づく。

血は巨狼の口の端からこぼれていたのではない。巨狼の右頬から流れていたのだ。

その出血量はどんどん増えていく。すさまじい出血量。

そして、その理由は次の瞬間にわかった。

グオオオオオ！

巨狼が叫ぶために開いた口、その上顎の右側の牙すべてがたたき折られ、更には右頬が首の中ほどまで裂かれていたのだ。

「ふむ、本気まで出す必要はなかったか」

魔物たちは、自分たちより後ろ、つまりは森側から聞こえた声に恐怖した。

ズドオン

魔物たちが恐怖で動けないでいる間に、巨狼は地面に倒れ伏した。魔物たちは、その音を聞いたときに、自分たちの命があと少しで終わることを確信した。

「お帰りなさい、エンディさん」

「ただいまー」

新兵である二人は口を開いたまま、何も言えないでいた。

アステイが、『エンディさんは玄関ホールに召喚します』といったので、そこまで着いて来たが、そこに召喚されたエンディは、なんと例の巨狼の死体を片腕で引きずっていたのだ。

その巨狼の大きさは、立っている状態の高さは6メートルほど、

頭から尻尾までの長さは、15メートルほどだろうか。とても、人間の持ち運べる重さの物体ではない。

「お！お前ら二人もお疲れ」

「お疲れ様です！」

こんなときでも、挨拶を返すことができるのは、軍の教育の賜物だろう。

「エンディさん、今日はたいしたことなかったからいいですけど、あんまり無茶しないでくださいよ？」

「大丈夫、無茶ってんならエリア様たちの方がずっと無茶だろ」

ゲイリヤとウエイズは思う。よく考えると自分たちも、部隊編成によつては城壁の外で野営していた可能性があったのだと。

それを思つた二人は、背筋が凍るような思いだった。

エンディが、そんな二人のほうを向いて、投げやりな感じで告げる。

「ああ、お前たち二人、結構見込みあるから、今度うちの道場に来い」

「……どういうことでしょうか？」

「いやな、お前たち最初あんな感じだったから、どうせ着いて来いって言つても、足がすくんで動けないだろうと思つてたんだ。それがどうだ、しっかり着いてこれたし、ペース上げるって言つたら上げたし、……なにより、死ななかつた。それで、今日会つたのも何かの縁だと思うから、気が向いたらうちの道場に来い」

二人はあつけにとられた。

なにせ、エンディの門下生は軒並み直属部隊に所属しているからだ。

二人にとっては、死ぬほどの経験をさせられたかわりに、唐突に出世街道が開いたわけである。

しかし、当然ながら不安もあった。

「見込みがある……というのは、私たちも魔物に素手でダメージを与えることができるようになるということですか？」

「ん？それどころか弱いやつなら素手で倒せるようになるだろうな。剣ありなら中級もやれるだろ。……まあ、そんなことはまず私の鍛錬に耐えてからだが」

二人はその鍛錬という言葉に、地獄をイメージしたが、道場に行かないという選択肢は、頭に浮かびすらしなかった。

この日、進軍開始の日が、ゲエイリヤ・グランスとウェイズ・レイガーの、運命の分岐点だった。

一章 四 最初の夜 進軍部隊側（前書き）

一日空いてしまったけれどこの程度の完成度と文章量ですみません。完全に言い訳になってしまいましたが、この小説もどきは、書き溜めなどをまったくせずに直接「小説家になろう」でうちこんでいるのです。しかし保存しわすれて消してしまうことが二回ほどあり……こんなことになってしまいました。途中保存大事ですね。中二病とノリとテンションに任せて書いて、推敲もしていないため、非常に読みづらと思います。ご容赦ください。

一章 四 最初の夜 進軍部隊側

インティア軍は魔物の大群と戦闘していた。

深夜に戦闘が開始して、すでに4時間が経過し、東の空が少しずつ白み始めていた。

現在、インティア軍は完全に魔物たちに包囲されている。いや、現在、包囲されているというのは間違いだろう。正確に言うならば、最初から包囲されていた。

最初に魔物に気づいたのはエリアだった。

仮眠をとっていたエリアは、いやな予感を感じ、目を覚ました。

目を覚ましてすぐに、エリアは第二の魔眼を使い、半径500メートル以内の状況を見渡した。

エリアの魔眼は三種類ある。第二の魔眼は、透景と呼ばれる能力だ。

透景は千里眼に近い能力で、全方向を透視し、超遠距離まで見ることが出来る。またそれだけでなく、自分が視認しているものに関する、自分の欲しい情報を視認することができる。ただし、視認する範囲や、視認する情報の内容などによって、魔力消費量が跳ね上がるという特徴を持つ。そのため、長時間の長距離監視には千里眼が向き、戦闘などの場面には透景の方が向いていた。

透景によって、エリアの視界に映ったのは、外周の見張りからも見えない距離から、インティア軍を包囲しつつある魔物たちの姿だった。

エリアはすぐに、リグリアを介して、伝達部隊に命令を下す。

『全部隊長へ向けて、全軍最大警戒態勢へ移行するように、転送伝達を送れ』

その命令はすぐに伝達部隊内の召喚術者によって、全部隊長に伝達され、すぐに全軍が動き始めた。

転送伝達というのは、召喚術の応用によって作られた転送術式で、対象指定された人物の脳に、術者の脳から直接情報を伝達するという伝達方法だった。

この術式を開発したのはエリアで、いまだに伝達範囲が超遠距離までとはとかないことや、消費呪力がかなり多いという欠点を持っていたが、かなり有用な術式であった。

転送伝達が使われる状況というのは『相手に自分たちの情報を教えかねない信号弾がつかえず、伝令を走らせるほどの余裕はない状況』だ。

今回の場合は、魔物を刺激することなく、可及的速やかな戦闘態勢への以降が求められる状況であったため、転送伝達が選択されたのである。

魔物たちの包囲は、見張りに見つからないために、かなり遠い位置で行われていたが、気づいてしまえば、逆に好都合であった。

魔物たちの方も、こちらを視認はしていなかったようなのである。おそらく、においなどで大体の位置を把握していただけなのだろう。インテリア軍が戦闘準備を開始しても、魔物たちが即座に襲撃してくることはなかったのだ。

そうして、インテリア軍の戦闘準備は、ぎりぎりのところで整った。むしろ戦闘準備が完了すると同時に魔物の襲撃が開始したぐらいのタイミングであったといえる。

全方向から、視界を埋め尽くすかのように殺到する、魔物の大群を、インテリア軍の弾幕がなぎ払うところから、戦闘が開始した。

インテリア軍の使用する銃は、よほど上手く当てないと魔物を一撃で倒すことはできない。だが、それはつまり、上手く当てさえす

れば、一撃で倒しうるということだ。それだけの威力をもっている上に、連射性能や射程距離もかなりのものとなると、接近しなければ攻撃できない相手には、かなり有効な武器であった。

また、仮に倒せなくても、動けなくするだけで、後続の障害になつてくれるのである。動けなくするだけなら、倒すことよりはずっと簡単だ。

その上、戦列が整っているのだ。銃の有効度は個人での戦闘などに比べ、跳ね上がっていた。

インティア軍の布陣は楕円形だ。両側の森には、一番近いところでも50メートルは距離がある。魔物たちはこの50メートルをこえる事ができなかった。

魔物の中には最高速度が時速200キロメートルを超えるものもいたが、そのすべてが、最高速度に至る前に弾幕の餌食となっていた。

魔物たちはインティア軍の視界の、ぎりぎりの位置で包囲していたのが、あだとなった。突撃し始めると同時に、インティア軍の視界に入り、スピードがのる前に射殺されてしまうのだ。また、仮にスピードにのり始めても、それより前に倒された魔物の死体が障害物となり、結局的にされる。

結果、戦闘開始から30分で、インティア軍の戦列まで到達できた魔物はたったの1体。それも、中級の魔物が単独で弾幕を突破しただけで、組織的な突破は皆無である。

開始30分の時点ですでに、街道上の有効射程付近や、森と街道の境界付近には、魔物の死体の山ができていた。

それ以降はどんどん襲撃は散発的なものとなっていくた。

そのときは、エリアは「魔物も死に対して恐怖を感じる。単純に突撃するだけでは、自分たちが殺されるだけだとわかったのだから、そのうち魔物たちも引いていくだろう」と、思っていた。

しかし、魔物たちの襲撃は、散発的ではあるが、延々と続いた。

魔物がこないと思って、気が緩みそうになると、襲撃してくるような状況。

そのような状況が3時間半つづき、状況は完全に持久戦へともつれ込んでいた。

一章 五 最初の夜 進軍部隊側 二（前書き）

続きです。

中二病とノリとテンションに任せて書いて、推敲もしていないため、非常に読みづらと思います。ご容赦ください。

一章 五 最初の夜 進軍部隊側 二

「兵には交代で休息をとるようにといつてあるが、実質この状況でまともに休息を取れるとおもつか？」

「ほとんどのものは取れていないでしょう。よほど豪胆なものでないといこの状況では眠っていただけません。それでも、肉体を休める暇のある一般兵はまだましでしょう。術者にはこの四時間ずっと、補助召喚を続けさせていますからね。彼らの消耗はかなりのものだと思います」

補助召喚というのは、周辺に常時影響を与える生物を召喚し、味方のサポートをすることをいう。現在インテリア軍のほぼすべての召喚術者は、この補助召喚によって、周囲の生物の動体視力と集中力を上昇させる生物を召喚していた。

インテリア軍が魔物に突破されないでいられるのも、かなりの部分が補助召喚のおかげといえるだろう。

銃で標的に照準を合わせるのにかかる時間は、一般的に4秒程度だといわれる。地球においても、戦場で物陰から物陰へ移動したりする場合にも、4秒以上相手に姿を晒さないというのが基本だ。

しかし、補助召喚の効果によって、現在の兵士たちは、ともに狙いをつけて撃つとしても、1秒前後で照準を合わせて撃つことができる。

その上、現在のインテリア軍のように戦列が整っていれば、そこまで正確に狙いをつける必要はない。弾薬は大切で、あまり無駄弾は撃ちたくはなかったが、それ以上に敵に接近を許さないことが大切だ。

その二つの状況が重なった結果、敵が視認できる位置まで来れば、ほぼ一瞬で蜂の巣にできるほどになっていた。

「確かに、そろそろ召喚術者はまずいな」

現在、召喚術者の多くは、4時間の間、ずっと召喚術を維持していたのだ。呪力は限界に近いだろう。

野営の準備が完了してから、魔物の襲撃まで、7時間ほどの休息の時間はあった。しかし、その7時間には食事の準備や翌日の日程や、各伝達事項の伝達、新兵への教育などの時間も含まれている。

その結果、休息という休息は、長く取れたものでも3時間。時間的にちょうど見張りにあたっていたものなどは、休息がまったくなかったものもいる。

一日中歩いて疲労していたところを、ほんの少ししか休息をとっていないうちに襲撃を受けた状況。更にそれが4時間を越えて持久戦の様相を呈している。

このまま疲労を蓄積させていけば、サグリスへの到着も遅れ、さらに襲撃を受ける時間が増えるだろう。

そのようになってしまったら、魔物の攻撃を防ぎきれなくなるのも時間の問題だ。

「仕方ないな。……リグリア、あれを貸してくれ」

エリアの言葉に、すぐにリグリアが反応する。

エリアに歩み寄ったリグリアが渡したものは、遠めには菱形に見える、八面体の形をした水晶だ。

エリアはそれを受け取ると、それを手に持って目を閉じ、しゃべり始めた。

「アステイ、起きているか？」

淡く輝くその水晶こそが、エリアがアステイに渡していた、通信用の魔道具だった。

「はい、起きておりますが、何か？」

「アステイ、お前の千里眼で、私を中心にした半径3キロほどの領域から、敵のリーダー格を見つけることはできるか？」

エリアがアステイに問うと、水晶からくすくすというアステイの笑い声が聞こえ始めた。

その笑い声がどうということなのか、エリアが問おうとすると、まるでそれをさえぎるかのようにアステイの声が聞こえてきた。

「エリア様、言い方が間違っています。」見つけることができますか？……ではありません。」見つける」です。エリア様がすべきこととは、できるかどうかの確認ではなく、命令することですよ。そうすれば、あなたの直属の部下は結果を示します。

第一、私がその程度のことでもできないと思っているのですか？私の瞳は悪魔の瞳ですよ？」

そういわれて、エリアはアステイのことを思い出す。

この世界ではまだ小さな子供でしかないが、前世では世界最高の情報屋で、裏社会の深いところに強い影響力を持っていたらしい。

さっきのエリアの言葉は、そのプライドを刺激してしまったのだろう。

そのことに対して、心の中で謝りながら、エリアはアステイに対して命令を下す。

「では言い直そう、アステイ。私たちインティア軍を包囲している魔物たちのリーダー格となるやつを、早急に探し出せ」

「了解いたしました。我が主のご命令に、結果を示しましょう。その魔物たちのリーダー格となるのは、エリア様が今向いていらっしやる向きから、右68度の方向、4562メートル先にいます。質はおそらく上級。巨大な鬼のような魔物です」

早かった。すでに見つけていたのだろう。

エリアはそれを聞き、笑った。

「ハハ、さすがだ。早い。そして、透景を使って自分で探そうとしなくてよかった。それだけ遠いのなら、透景を使っていたら、仕留めるための魔力が足りなくなるところだった」

エリアはそういって、司令部のテントから出ると、天へ向かって手を掲げた。

エリアの頭上10メートルほどの位置に、半径5センチほどの、針金細工の芸術品のような球体が現れる。

さらにそれは数を増やしていき、ちょうど敵のリーダーがいる方向へ、一直線に並んだ。

その数およそ20。

光り輝く針金細工のような球体が、その場で回転し始める。

一般兵の目には、10メートルという高さもあって、まったく目に留められることもなかったが、魔法の心得がある、直属部下や、直属部隊員の一部には、その球体がすさまじい威力を持った爆発物のように見えた。

エリアの保有魔力量は少ない。

いや、この世界の人間にしては多いほうではあるだろう。

しかし、魔王から直接転生したわけではないエリアは、間で人間に転生するとき、魔力は必要ないと神との契約で言っていたため、魂そのものが魔力をほとんど持っていないのだ。

そのため、エリアの魔力はほとんど器そのものの魔力だった。

神との契約の代償が魔力だけで十分だったため、魔眼が残っていたのがせめてもの救い。というのが、直属部下たちの認識だった。

しかし、目の前でエリアが展開してる魔法は、ありえないほどの威力を持っているものだった。

エリアは、自身の行う技術革新や改革に伴う激務のため、魔法を披露するような時間はまったくなかった。自身の戦闘能力向上を特に望まなかったことも有り、直属部下との特殊技能に関する交流もあまり行わなかった。そのため、直属部下でもこの術式を見るのは初めてだった。

そして、それは仮にエリアが誰かに教えようとしても、できるよくなるものではなかった。

エリアが前世ですんでいた地球。そこに存在したフィクションではよく、魔法を使う前に魔方陣を書いて、魔法の発動を補助するのではなく、魔法発動時に魔力そのもので魔方陣を描画し、魔法を発動するかなような描写があった。

しかし、これはかなり難しい技術だ。魔力を正確に動かす、コントロール能力が必要だし、しっかりと魔力を固定しなければ、魔方陣の効力が発揮されない。

そのため、魔力による魔方陣描画技術は、多くの世界で秘術とされる。

エリアがやっているのは、そのさらに上の技術だ。

エリアが魔王だった頃にすんでいた世界では、魔法細工といわれていたものを魔力で描画しているのだ。

魔法細工というのは、魔方陣の3次元版のようなものだ。

魔方陣が平面に図形を描いて、魔法の発動や効果を補助するのに対し、魔法細工は立体に、3次元的な図形を描き、魔法の発動や効果を補助するものだ。

魔法細工は3次元的であるがゆえに、魔方陣よりもこめられる情報量が圧倒的の多く、そのため、魔力の効果効率がすさまじく高かった。

ただ、問題として、図形が複雑になるがゆえに、まともに作成できるものが、エリアが魔王だった世界でも10人程度しかいなかったことだ。

しかし、エリアはそれを魔力で描画するという離れ業をやっていた。

絶妙にコントロールされた魔力は、無駄に発散されることなく、すべて魔法細工の効果発動に注ぎ込まれていた。

そして、魔法細工は、描かれた図形に従って、超高効率の魔法効果を、今にも発動しようとしていた。

おそらく、エリア程度の保有魔力で発揮しうる最高の威力だと思われた。

しかし、エリアはさらにそこに詠唱を重ねる。

「我が意思は槍。我が敵を砕くもの。我が心は砲。我が敵へ届けるもの。槍と砲、力と速度、意思と心、交わり穿て！『球列槍砲』！」
詠唱の終了と同時に、音もなく、鏃型のすさまじい力が、エリアの真上の球体から放たれる。

その鏃はほかの球体を通過することに、加速を重ね、発動から一秒もかからないうちに、轟音とともに着弾した。

一章 五 最初の夜 進軍部隊側 二（後書き）

最後、鏃が発射された直後に音がしなかったのは、あの術式が目標に着弾するまで、物理的な影響力をもたないためです。

一章 六 苦難の予感（前書き）

昨日まで用事で書けませんでした。小説書くのってやっぱり難しいですね。

中二病とノリとテンションに任せて書いて、推敲もしていないため、非常に読みづらいと思いますが、ご容赦ください。

一章 六 苦難の予感

エリアが一撃の下に魔物たちのリーダーを粉碎した後、一時間をかけて魔物たちは引いていった。

襲撃の間隔がだんだんと伸び、包囲が崩れていくうちに、空の彼方では日が昇り始めていた。

「お嬢、どうして最初からあれをやらなかったんです？」

エグストが言う『あれ』とは『球列槍砲』のことだろう。エリアはその問いに、振り向かずには答える。

「あれは切り札の一つだ。こんなタイミングで使いたくはなかった。あれを使ったせいで、私はかなり魔力を消耗した。最初の一日二日で、軍全体を大きく疲弊させたくなかったとはいえ、これでもう、決定的な危機が来ても、もう大規模な魔法は使えないだろう……そうなるも、もう残る切り札を私は二つしかもってない」

「二つはあるんですか……」

リグリアがあきれた顔で言うのに、エリアは今度は振り返った。

「その二つの切り札は絶対に切りたくない札でもある。だから、お前らには私がそれを使わなくてもすむように、しっかりと働いてもらうぞ」

「了解しました」

「失礼します」

リグリアが軽く微笑みながら答えたところで、ミアリアが司令部の天幕の中へ戻ってきた。

ミアリアは、一本の三つ編みにまとめた金髪と、縁のない伊達眼鏡が、落ち着いた雰囲気を与える美女で、リグリアに次ぐ二番目の領主補佐だった。29歳には見えない外見の若々しさと、はかなげな雰囲気から、実はかなりの人気を誇っている。

ミリアはエリアのほうを向くと、手元の紙に目を落とし、報告を始めた。

「領主様、今回の戦闘における全軍の状況ですが、人員の被害についてはほぼ0といえます。実際には重傷者が4名でしたが、死者は出ておらず、全体から見れば被害は0といって差し支えないでしょう」

「そうか……レインのおかげだな、迅速な対応ありがとう」

「いえ、私は自分の使命を果たしただけです」

エリアの言葉に、レイン・ゲートティアは軽く首を振って答えた。

レイン・ゲートティアはエリアと同じ年齢の青年で、エグストの前番目にエリアが出会った転生者だ。中性的な顔立ちと、黒に限りなく近い、濃い紫の短髪、高めの身長と、整ったルックスをしている。前世において、遠距離攻撃魔法は使用できなかったが、近距離での魔法においてかなり優秀であったため、格闘技術と魔法技術をあわせた魔法戦技で、世界最高レベルの戦闘能力を持っていたらしい。

レインは、エリアが野営準備中に張った、簡易結界の効力対象だった。

その簡易結界の効果は『外部から内部に魔物が侵入した場合、その位置情報を効力対象に即座に伝達する』というもので、三つの範囲に分けて張られ、それぞれ三人の効果対象が指定されていた。

そして、魔物に突破された位置を含む範囲の、結界の効果対象がレインだったため、レインがその魔物の迎撃を行ったのだった。

ミリアは一瞬だけレインに顔を向け、すぐにもどして報告を続けた。

「人員の被害はそうのようにほぼ皆無でしたが、弾薬はかなり消費しています。サグリスまでは余裕で持つでしょうが、このペースでの

消費だと、後々の目的達成がかなり遅れることになると思われま
す」
「今になってみれば、早めに『球列槍砲』をつかっておけばよかつ
たな。……後悔先に立たずとはよく言ったものだ。弾薬の消費量に
ついては今はどうしようもないな。後で各部隊ごとの弾薬消費量に
あわせて、運搬部隊から再分配しよう」

「了解しました。」

戦闘を経てからの兵の状態ですが、疲労蓄積が相当なものです。
今日の出発は、どんなに早くとも正午以降になりますね」

「そうか……次の襲撃に備えるためにも、時間には余裕を持たせよ
う。急ぎすぎた結果、残っていた疲労のせいで、魔物の襲撃に耐え
られないというのは避けたい」

それからミリアの報告は、段々と細かい物になっていった。各部
隊ごとの弾薬消費量や、召喚術者の疲労状態、極度の緊張から精神
に深いダメージを受けている新規兵、報告された内容それぞれにエ
リアが指示を下す。

そうしてあらかたの指示を出し終えて、エリアがようやく本題に
入った。

「さて、今回の魔物の襲撃についてだが、おかしい点がある」

「魔物が持久戦を仕掛けてきたことですね」

すぐにリグリアがエリアの新しい話題の内容を察知する。

いや、すぐに察知ができるほど、異常な襲撃だったのだ。

「ああ、確かにおかしかったですね。魔物たちにリーダーがいて、
統率されていたというのはわかりますが、あまりにも魔物らしくな
かった」

エグストの指摘は正しい。今回の襲撃は魔物らしくなかった。

この世界で魔物が人間を襲うのは、仕留めやすい獲物だからとい
うことに他ならない。

仕留めづらいどころか、反撃にあって死にかねないような獲物に、
いつまでも執着するのは、まったくもって魔物らしくなかった。

「あの攻撃の意図は、こちらの側から考えれば、こちらを休ませず、進ませないためのものだというのは明白だ。

しかし、魔物は基本的にこの世界に召喚されて現れた生き物だ。召喚された生き物である以上、理性は持たないはずなんだ。

理性を持たない以上、知能が低い可能性が高い。こちらの目的を察知し、阻害するために、持久戦を仕掛けるといふ作戦を考えられるか怪しいところだ。

さらに、仮にそのような作戦をリーダーが思い浮かんだところで、自分が死にかねないような命令を、理性を持たない魔物たちが守ると思えない。

いや、少数の同族のみの群れなら守るかも知れないが、あの数は多すぎた。その上異種混合。これまたありえないことだ。あのリーダー格だった魔物も、そこまでの力やカリスマを持っていたように思えない。

もしかしたら、あのリーダー格は召喚された魔物がこの世界で生んだ突然変異体で、偶然理性を持ち、なおかつ他の魔物に大きな影響をもたらすような、フェロモンや力を持っていたのかもしれない。しかし、そんなものが生まれた上に、偶然私たちの前に現れるような確率は限りなく0に近いだろう。

つまり、私が言いたいのは……」

「……後ろで、糸を引いている存在がいる……ということですね」
エリアの言葉を、最後にミリアが引き継いだ。

その言葉は粘りつくように、司令部の空気を絡めとる。

重い空気の中、エリアと直屬部下たちは、まだ見ぬ敵の存在を想像し、新たな苦難を予感した。

一章 七 見えない敵への考察（前書き）

続きです。今回は相当酷いことになってる予感がします。矛盾とかあつたり、あまりに酷かったりしたら、指摘していただくと助かります。

中二病とノリとテンションに任せて書いて、推敲もしていないため、非常に読みづらと思います。ご容赦ください。

一章 七 見えない敵への考察

「それにしても、仮に後ろで糸を引いている存在がいたとして、どのような方法で魔物たちを操っていたのでしょうか？魔物のリーダーを倒したことで、魔物たちが引いていたことを考えると、支持系統に魔物が組みこまれているということでしょうか？」

「いや、リーダーの力量と従っていた魔物の数を考えれば、もっと何かあるはず。上級魔ぐらいではあの数をなんの仕掛けもなしに従えることはできないだろう。理性なしの魔物が力のみであの数を従えるなら、最上級かそれより上……超級の強さが必要だ。」

けれどまあ、支持系統に組み込んでいるというのは正解に近いのではないかな」

三日目の昼、リグリアとエリアはそのようなことを話しながら歩いていた。

二日目の夜は、エリアたちの苦難の予感をよそに、平和に過ぎた。襲撃は一切なく、それどころか空気も澄んで、空も晴れ、満点の星空が美しい夜だった。

しかし、兵たちの休息はそれでも十分にとることができていなかった。

前日の大規模襲撃の恐怖や緊張から、夜中張り詰めた空気がインティア軍の野営地を満たしていた。

その結果、進軍中ということを考えれば超え以上ないほど快適な夜であったのに、十分な休息を取れていない兵が、多くいたのだ。

特に新兵にはそういった傾向が顕著で、新兵中心の輸送や伝達などの直接戦闘の少ない部隊は、戦闘には直接参加しなかったにもかかわらず、以前より明らかに動きが悪くなっていた。

「昨日は襲撃がなかったというのにこの状態……襲撃がなくて助かりましたね」

「ああ、やはり最初の襲撃は、兵たちに大きな衝撃を与えたようだな。」

それにしても、なぜ昨日は襲撃がなかったのだと思う？」

「裏で糸を引いているものたちが、ここら一带は完全に、あのときのリーダー格の魔物に任せていたため、すぐに魔物たちをまとめあげて、攻撃するというのができなかったのではないでしょうか？」

「なるほど……ミリアはどう思う？」

「リグリアさんの意見も一理あると思いますが、それよりも裏で糸を引いている者たちが、こちらの様子を伺っているという可能性が強いのではないかと思います。……銃は私たちの中でも、前世から存在を知っていたものが、領主様とエグストのみですから」

「ふむ、どちらもありそうだ……」

エリアたちの中では、すでに『敵』の存在はあるものとして話が進んでいた。こういふときは悪い場合を想定して動くのが基本だ。

「『敵』のほうにも異世界からの転生者がいると考えるのは当然のことだな。……それにしても、あれだけ大量の魔物に影響を与えているとなると、相当強力な力を持っている集団であるか、かなり高度な召喚技術を持っていて、無限召喚術式に介入しているかのどちらかであるのだろうな」

「そうですね。……そして問題なのは、彼らには世界を救う気がなく、それぞれどこか我々を妨害してきていることです」

「ああ、ミリアの言うとおりだ。そのことを考えると、無限召喚に影響を与えている可能性の方が高い。無限召喚に介入できているなら、この召喚災害が続くことは、実質自分たちが世界全体に対して大きなアドバンテージを持っていることになるからな」

「それはむしろ好都合ですね」

レインの言葉に、エリアとミリア、リグリアの三人が振り向く。

レインは軽く口の端を吊り上げたような表情で、言葉が続けた。

「そのほうが話が単純です。敵にすでに召喚術式に介入する技術があるなら、私たちは後はそいつらを倒すだけです。召喚術式の研究に使われるはずだった時間が、必要なくなりませう」

「だが、その分障害は大きくなる。好都合と呼べるほど、低い壁じゃないぞ」

レインの言葉に返したのはリグリアだ。リグリアの認識は、レインほど甘くない。

さらに、リグリアの言葉を引き継ぐようにミアアが言葉を続ける。「もともと、『敵』がいない状態でも、かなりの困難を極めると思われていたんだ。なにせ、作戦なんてものがまったく通用しないほどの、物量の中突つ込むような状況だからな。全方向を無数の敵に囲まれている、そんな中で、敵がまともな戦略を持って動き出したら、こちらはひとたまりもないんだ。敵がそこまで精密な指示を、魔物たちに出せないことを願うばかり。そんな状況を好都合と本当にいえるのか？」

「私は好都合だと思いますが？あの襲撃でも、魔物たちは銃の弾幕を突破できなかった。あの戦闘でもわかるように、隠れる場所のない平地では、我が軍は非常に有利だ。なにせ相手は飛び道具を使つてこないから、こちらは元から隠れる必要がない。一方のみが飛び道具で弾幕を張れる状態だ。」

そのうえ、どれだけ数がいるとはいえ、魔物を終結させるのに時間がかかる以上、一度の動員できる数には上限があります。そして、最前列に並ぶことのできる魔物の数は更に限られる。この前の戦闘における、最前列の魔物の数は、限界値であったように思います。そうなれば、後は弾薬が切れない限りは、繰り返ししかないんじゃないでしょうか？通常の兵法を魔物に用いたところで、我が軍は優勢な状況を展開できるはずですよ」

「お前の意見もわかるが、それは机上の空論だな。兵は人間だ。肉体と精神に限界がある。お前の言ったようなただの繰り返しにしかならないとしても、兵たちがそれに耐えられない可能性は大いにある」

る」

レインが返した意見への、リグリアによる更なる反論。

好戦的なレインによる発言が、場を二分にしていた。

そこに、エリアが割ってはいる。

「そこまで対立することはないよ、三人とも。ミアとリグリアのいうように、悪いパターンをシミュレートして、その対策を立てるのは当然すべきだ。その上で、レインの言うようなポジティブな思考を持って、物事を捉えるのは悪いことじゃないだろう。ネガティブすぎる考えは、進む力を削ぐ。そして、私たちトップの考えは、下の者たちにも伝わっていくものだ。」

実際にはミアとリグリアの意見を基本にしつつ、レインのようなポジティブな考え方でいるのが一番だろう」

エリアの言葉は、ただそれだけで場を和解させた。

エリアの言葉は、同じ事を他のものが言うよりも、なぜだか圧倒的な説得力を持っていた。

それは、落ち着いたようでありながら、圧力のあるその雰囲気とインテリアで上げた数々の功績によって磨かれた、カリスマによるものだ。

そして、エリアのカリスマを支えるものそれだけではない。

エリアのカリスマを支えるものの一つ、それは魔物の襲撃を察知した直感だ。

「それで、これは私の直感でしかないんだが……昨日襲撃を受けなかったことに関する話は、ミアとリグリアの意見、その両方によるものだろう。そして、今も『敵』は私たちを調べている。それも直接見える位置から……透景がつかれば手っ取り早いのだがな。すでに、アステイたちとの連絡もかなり難しい距離まで来たから、それに使う魔力も可能なら節約したいし……やはり、偵察に出した者たちが運よく捕らえてくれることを願うしかないか」

エリアの言葉を聞いていた三人の表情が驚きに変わる。

エリアの直感は『魔王時代に魂に刻まれた異能』の一種であり、

内容が具体的になるほど、あっている確立があがる。

そのことを、領主補佐最古参の三人は身をもって知っていた。

三人は、現在エリアからの命令で、広範囲の偵察を行っている同僚に思いをはせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3554z/>

救済の進軍

2011年12月24日02時55分発行